

2010年度（第12回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

総 評

米 田 眞 澄

本年度「女性学インスティテュート賞」に応募された論文は九編でした。選考委員の先生方の採点と委員会での議論の結果、総合文化学科の卒業生である新藤祐子さん（I05472）の「〈わたしたち〉のホモホビアの可能性—映画『ブロックバック・マウンテン』を読み解く—」が最優秀賞に選ばれました。

まず、選考委員の先生方の講評と選考委員会での議論を踏まえたうえで、新藤さんの論文の紹介と講評をします。新藤論文は、私たちの無意識の中に潜んでいる同性愛者に対する差別意識がどのように働いているのかを、カメラの動きを利用して観客である私たちに体験させることで、「同性愛者に対して『寛容に』なった私たちの中に潜んでいるホモホビックな〈わたしたち〉を捕らえたと、論じています。新藤論文は、先攻研究や時代的背景にも目配りがなされており、ジェンダーの視点で映画作品をよく読み込んでいること、同性愛者に対する差別的な構造について、明快に説得的に分析されていることが高く評価されました。

いっぽう、1章と2章のつながりが十分であるとは言えないとの指摘もありました。2章では、1章で抽出された同性愛者に対する差別的な構造によって「わたしたち」の差別的な認識の枠組みが明らかになるとしますが、1章での分析自体に2章における「わたしたち」の視座を組み入れて論じることができれば、一層よかったのではないかと思います。また、〈わたしたち〉という言葉の使い方について、説明が必要であったかと思われます。さらに、抑圧の構造の攪乱を映画の内側に探ることはできないものかとの指摘もありました。しかしながら、新藤論文は、学部学生の卒業論文として執筆したものとしては、文章力があり、論旨も明確で、よく書かれていたと思います。

優秀賞には、心理行動学科の卒業生の若林弘恵さん（P06813）と小西くみ

こさん (P06744) の共同研究である「女子大学生における乳がん検診受診行動への説得の効果」と大学院人間科学研究科の岸本小百合さん (GH1012) の「父娘関係が娘の男性性に及ぼす影響」が選ばれました。若林・小西論文は、必ずしも受診へとつながらない多くの要因を丁寧に分析している点、検診率向上のための効果を調べるための実験設定の独創性が評価されました。いっぽう、仮説が多く、解析後の考察が複雑で理解しづらい点が指摘されました。岸本論文は、先行研究の論点をよく整理し、「娘が父親を同一視すること」「娘が父親から個人と扱われていると感じること」の影響に分析上の焦点を絞り込む過程が明確であり、論旨も一貫している点が評価されました。いっぽう、被験者が女性だけで偏っており、総数も少なく、実験で考慮すべき点や欠点について考察で述べるべきであることが指摘されました。

最後に、惜しくも受賞には至らなかった論文を受付順に紹介します。日野夏希さん (P06714) の「オリンピックから見る女性とスポーツの関わりの変化」、草間沙織さん (P06746) の「介護が娘とその家族にもたらす影響」、二瓶詩織さん (I06437) の「子育て支援—保育所と地域の連携—」、大喜多香枝さん (GE0862) の「イノセンスの喪失と主体性の確認—ローザ・ギーの The Friends と Edith Jackson にみる女性主人公の成長—」、中蔵美希さん (I06430) の「少年漫画の中の新しい女性像」、山脇野枝さん (GE0961) の「明治女性の『学び』についての考察—神戸女学院第一期卒業生阿部マサの足跡を辿って—」です。いずれも力作ではありましたが、先行研究についての整理、論旨の明確性、テーマの独創性などについて課題が多いとされました。しかしながら、本年度は多くの応募論文があったことは喜ばしいことでした。これからも、多くの学生が「女性学」に関心をもって、懸賞論文にも積極的に応募してくれるような環境を作っていきたいと思います。

(女性学インスティテュート学生懸賞論文選考委員長)